母親の愛着スタイルと養育との関連

園田　菜摘

The Relationship between Maternal Attachment Style and Parenting

Natsumi SONODA

問　　題

愛着とは、「ある特定の他者に対して強い結び付きを形成する人間の傾向」(Bowlby, 1977)のことを指し、乳幼児期の子どもが養育者に対して形成するものだけでなく、成人期を含めた幅広い年代への適用の検討も進んでいる(Hazan & Shaver, 1987 など)。Bowlby が愛着行動を、“ゆりかごから墓場まで”の人間性を特徴づけているもの、と述べているように、乳幼児期に愛着対象との間で形成された心的表象である内的作業モデルは、発達とともに特定の関係性を超えて、その後の対人関係全般に影響するものであると仮定されている。

成人を対象にした愛着研究の 1 つに、両親との関係性やその記憶によって愛着のタイプを測定、分類するアダルト・アタッチメント・インタビュー法(Adult Attachment Interview; AAI)がある。この AAI によって養育者の愛着を測定した研究では、養育者自信が自分の親に対して持つ愛着のタイプが自分の子どもに対する養育行動や子どもの愛着形成に影響を与えるなど、愛着の世代間伝達について明らかにしてきている(例えば、Crowell & Feldman, 1991 など)。しかし、愛着が親に対する心的表象を超えて一般的他者へと広がっていくとする考え方であるならば、成人がわが子に対して行う養育行動は成人自身の親との愛着関係のみで説明されるのではなく、より広い愛着関係を考慮に入れて検討される必要があるだろう。

そのような、親に限らない一般的な他者への信念や期待といった成人の“愛着スタイル”を測定するものとして、自己報告型の尺度法がある。この自己報告型の尺度法による愛着研究では、これまで主に親密な異性関係や恋愛関係といった対人関係について数多く検討されている(例えば、Feeney & Noller, 1990)。一方、成人の“愛着スタイル”と養育行動、子どもの発達との関連について取り上げた研究は非常に少ない。しかし、その中でも、母親の愛着スタイルが子どもの心の理論の発達と関連することや(久崎, 2014)、母親の愛着スタイルが子どもの否定的感情に対する母親の否定的反応、子どもの問題行動に影響を与えること(小西, 2016)などが示されている。しかしこれらの研究では、母親の愛着スタイルがどのような養育行動を通して子どもの発達に影響するかを検討していなかったり、検討していても限定的な場面での養育行動に限られており、愛着スタイルが日常的な母親の養育行動の特徴にどのように影響するのかは不明のままである。愛着が人の生涯に渡って重大な

影響を与え続けるものであるならば、それまでに培われた一般的他者に対する愛着スタイルが母親の養育行動や子どもの発達にどのように影響していくのかについて詳細に検討していく必要があるだろう。

そこで本研究では、母親の愛着スタイルが育児意識、養育態度といった母親の養育の特徴や子どもの発達とどのように関連するのかについて検討していくことを目的とする。

方　法

手続き

都内近郊の私立幼稚園の年長児クラスの子どもを持つ母親を対象に、育児意識、養育態度などを尋ねる質問紙調査を行った。質問紙は幼稚園を通して 119 部配布し、86 部回収した（回収率 72.3%）。有効回答数は 83 部（70.0%)だった。

さらに、質問紙に回答した母親の子どもの中からランダムに 40 名程度を選び、子どもの発達を測定する面接調査を行った。面接は自由遊びの時間に幼稚園の 1 室で行われ、最終的に 33 名の子どものデータを収集した。

対象

対象となった母親の年齢分布は 25～29 歳 4.9%、30～34 歳 22.0%、35～39 歳 39.0%、40～44 歳 24.4%、45 歳以上 7.3%、不明 2.4%だった。子どもの性別は、男児 47 名、女児 35 名、不明 2 名だった。母親の就業形態は、専業主婦 67.1%、パートタイム 24.4%、フルタイム 4.9%、その他 3.6%と専業主婦が 7 割近くを占めていた。母親の学歴は、中卒 1.2%、高卒 22.0%、専門学校卒 25.6%、短大卒 13.4%、大学卒 37.8%と大学卒が最も多かった。

また、面接調査を行った 33 名の子どもの性別は、男児 16 名、女児 17 名で、面接調査時点での子どもの平均月齢は 68.25 ヵ月（レンジ 63～74 ヵ月）だった。

母親への質問紙調査

質問紙調査では、母親に対して、愛着スタイル、育児意識、養育態度などについて尋ねた。

①愛着スタイル：詫摩・戸田（1988)の愛着スタイル尺度を用いて、母親の愛着スタイルの測定を行った。この尺度は、Hazan & Shaver(1987)が作成した成人の愛着スタイル尺度の記述を基に作成された尺度であり、日本での適用可能性と妥当性が確認されている。「安定型」、「アンビバレント型」、「回避型」、の各 6 項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の 4 段階で回答してもらった。それぞれの項目を合計し、「安定型得点」「アンビバレント型得点」「回避型得点」とした。

②育児意識：荒牧・無藤(2008)の育児への否定的・肯定的感情尺度から 21 項目を作成し、「よくある」から「全くない」の 4 段階で母親に回答してもらった。すべての項目の成分負荷量が.30 以上になるまで因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったところ、1 つの項目を除いた 20 項目で 3 つの因子が抽出された(表 1)。そこで、第 1 因子を「育児負担感」、第 2 因子を「子どもの発達への不安感」、第 3 因子を「育児への非充実感」、と命名し、各

因子の因子得点を用いてそれぞれの下位尺度得点とした。信頼性係数は、第 1 因子は α=0.89、第 2 因子は α=0.84、第 3 因子は α=.65 で、ある程度の信頼性があることが示された。

表1. 母親の育児意識の因子分析結果

質問項目	因子1	因子2	因子3
[第1因子　育児負担感]			
・子どもが自分の言うことを聞かないのでイライラする。	.86	.11	-.05
・子どもにうまく対応できていないと感じることがある。	.77	.09	-.07
・子どもを育てるために我慢ばかりしている。	.71	-.14	-.14
・子どもがわずらわしくてイライラする。	.67	-.01	.12
・子どもに時間が取られて、自分のやりたいことができずにイライラする。	.63	-.22	.24
・自分の育て方でよいのかどうか不安になる。	.62	.29	-.12
・子どもが汚したり、散らかしたりするのでイヤになる。	.58	-.12	.39
・育児のことでどうしたらよいか分からなくなる。	.55	.40	-.11
・自分の子どもでも、かわいくないと感じることとがある。	.52	.12	-.07
・毎日、育児の繰り返しばかりで、社会との絆が切れてしまうように感じる。	.45	.05	-.16
・子どものことを考えるのが面倒になる。	.39	.10	.29
[第2因子　子どもの発達への不安感]			
・入園後、自分の子どもが他の子どもに遅れないでついていけるのか不安になる。	-.11	.86	-.09
・他の子ども比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思う。	-.14	.78	.18
・他の子どもにはできて、自分の子どもにはできないことが多いと感じる。	.12	.72	.09
・同年代の子どもと比べて、自分の子どもは幼いと感じる。	.02	.64	.02
・子どもをうまく育てていけるか不安になる。	.35.	.42	.01
[第3因子　育児への非充実感]			
・子どもを育てることによって、自分も成長しているのだと感じる。	.11	.09	-.68
・子どもを育てることは、有意義で素晴らしいことだと思う。	.07	-.03	-.59
・子どもを育てるのは楽しいと思う。	-.04	-.12	-.54
・子どもの成長が楽しみだと感じる。	.19	-.30	-.44
累積寄与率(%)	33.18	40.60	47.19

③養育態度:柏木(1988)のしつけ行動尺度から、子どもへの介入・過保護に関する 18 項目を採用し、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の 4 段階で母親に回答してもらった。すべての項目の成分負荷量が.30 以上になるまで因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったところ、5 個の項目を除いた 13 項目で 3 つの因子が抽出された（表 2）。そこで、第 1 因子を「自立尊重的養育態度」、第 2 因子を「威圧的養育態度」、第 3 因子を「保護的養育態度」、と命名し、各因子の因子得点を用いてそれぞれの下位尺度得点とした。信頼性係数は、第 1 因子は α=0.58、第 2 因子は α=0.60、第 3 因子は α=.52 と少し低かったが、内容としてまとまっていたため、このまま用いることとした。

表2 母親の養育態度の因子分析結果

質問項目	因子1	因子2	因子3
[第1因子　自立尊重的養育態度]			
・ねまきに着替えた時、脱いだ服の始末は一人でさせる。	.72	-.02	-.02
・一人でさせていると遅くなったり、うまくできないようなときは手伝ってあげる。	-.51	.09	-.05
・園へ持っていくものは、親が点検したり手伝わずに一人で用意させる。	.41	-.14	-.17
・子どもには、少々のけがや危険が起こることは、目をつぶることにしている。	.40	-.01	.04
・子どもがやりたがることは、少々下手でも危なくてもやらせる。	.36	-.22	.35
[第2因子　威圧的養育態度]			
・どちらかというと褒めてやるよりも叱ったり注意したりする方が多い。	.24	.86	-.01
・子どもがぐずぐずしたり、まごまごしたりしていると、早くするように注意する。	-.02	.78	.05
・家の中では少々のいたずらをしても叱らない。	-.09	.72	.01
[第3因子　保護的養育態度]			
・ちょっとした病気やけがの時にも医者にみてもらうようにしている。	-.01	.09	.53
・食事の時、魚や肉などを食べやすいように小さく切ってあげる。	-.27	-.03	.49
・お手伝いをさせている。	.20	-.12	.47
・夜中トイレに行く時、一人で行かせる。	.16	-.30	-.45
累積寄与率(%)	13.36	24.77	32.05

子どもへの面接調査

本研究では子どもの発達として、子どもの母親への認知と保育者への認知、仲間に対する効力感を取り上げ、子どもへの面接調査により測定した。

①母親への認知・保育者への認知：子どもの母親への認知は幼児用 CCP (Children's Cognition of Parents) 尺度 8 項目（後浜, 1978）、保育者への認知は幼児用 CCT(Children's Cognition of Teachers)の尺度 8 項目（森下, 1985）を用い、それぞれ作成した絵カードを提示しながら救助欲求場面と親和欲求場面における母親／保育者の反応について、子どもに尋ねた。子どもの回答を評定方法（林・一谷・小嶋, 1987）に従って評定し、全 8 項目のうち母親／保育者からの受容を表す反応語が出た項目の合計をそれぞれ「母親からの受容的認知得点」、「保育者からの受容的認知得点」とし、母親／保育者からの拒否を表す反応語が出た項目の合計を「母親からの拒否的認知得点」「保育者からの拒否的認知得点」とした。評定は、第 1 評定者と第 2 評定者が全ての子どもについて独立して評定を行い、2 者の評定が異なった場合には協議を行って最終的な評定結果とした。

②対人的自己効力感：幼児用対人的自己効力感尺度 12 項目(園田, 2016)の絵カードを用いて、子どもの仲間に対する効力感の測定を行った。各項目は 2 枚の絵カードから構成されており、1 枚目の絵カードで「けんかをしている友だちがいる」などの状況を子どもに説明し、2 枚目の絵カードの左右に描かれている「友だちを仲直りさせることができる主人公」と、「友だちを仲直りさせることができない主人公」から、自分が似ていると思う方

をどちらか1つ子どもに選択させた。さらに、その頻度についても大小の丸が描かれた絵から選択させ、最終的に「できる・いつも」「できる・時々」「できない・時々」「できない・いつも」の4段階で得点化し、合計点を「対人的自己効力感得点」とした。

結　　果

基本的属性との関連

母親の愛着スタイル、育児意識、養育態度が、母親の就業形態、子どもの性別、月齢によって違いがあるかについてt検定と相関を用いて検討した。その結果、愛着スタイルについては基本的属性との関連は示されなかった。一方、母親の育児意識の「育児への非充実感」は有職群の母親の方が無職群の母親より高いこと(有職群：M=.35, SD=.93, 無職群：M=-.17, SD=.79, t=2.66, p<.05)、母親の養育態度の「保護的養育態度」は子どもの月齢が低いほど高いこと(r=-.23, p<.05)が示された。

また、子どもの発達について、母親への認知、保育者への認知、対人的自己効力感が、母親の就業形態、子どもの性別、月齢によって違いがあるかについてt検定と相関を用いて検討した。その結果、有意な関連は示されなかった。

母親の愛着スタイル、育児意識、養育態度の関連

母親の愛着スタイル、育児意識、養育態度の関連について、相関を用いて検討した。その結果(表3)、母親の愛着スタイルの「安定型得点」が高いほど育児意識の「子どもの発達への不安感」が低いこと、「アンビバレント得点」が高いほど育児意識の「育児負担感」「子どもの発達への不安感」「育児への非充実感」がそれぞれ高く、養育態度の「威圧的養育態度」が高いことが示された。

また、育児意識の「育児負担感」と「子どもの発達への不安感」が高いほど、それぞれ養育態度の「威圧的養育態度」が高いことが示された。

表3.　母親の愛着スタイル、育児意識、養育態度の相関

	＜愛着スタイル＞			＜養育態度＞		
	安定型	アンビバレント型	回避型	自立尊重的	威圧的	保護的
＜愛着スタイル＞						
安定型				.15	−.10	.04
アンビバレント型				−.01	.26*	−.08
回避型				.04	−.06	−.04
＜育児意識＞						
育児負担感	−.11	.53***	−.03	−.00	.56***	−.12
子どもの発達への不安感	−.27*	.38***	−.00	−.06	.35**	−.02
育児への非充実感	−.19†	.28*	.10	−.15	.17	−.13

***p<.001,　**p<.01, *p<.05,　†p<.10

上記で示したように、母親の愛着スタイルの「アンビバレント型」と育児意識の「育児負担感」「子どもの発達への不安感」は、それぞれ養育態度の「威圧的養育態度」と有意な相関が示されたことから、愛着スタイルと育児意識をそれぞれ制御変数とした偏相関分析を行い、養育態度との関連を調べた。その結果、それぞれの育児意識(「育児負担感」と「子どもの発達への不安感」)を制御変数とした場合には、愛着スタイルの「アンビバレント型」と養育態度の「威圧的養育態度」との間に有意な関連は見られなかったが、愛着スタイルの「アンビバレント型」を制御変数とした場合には、育児意識の「育児負担感」(r=.51, p<.001)、「子どもの発達への不安感」(r=.28, p<.05)はそれぞれが養育態度の「威圧的養育態度」と有意な関連があることが示された。

子どもの母親への認知、保育者への認知と対人的自己効力感との関連

子どもの母親への認知、保育者への認知と対人的自己効力感との関連について、相関を用いて検討した。その結果、有意な関連は示されなかった。

母親の愛着スタイル、育児意識、養育態度と子どもの発達との関連

母親の愛着スタイル、育児意識、養育態度が子どもの母親への認知、保育者への認知、対人的自己効力感とどのように関連するかについて、相関を用いて検討した。

その結果、母親の愛着スタイルについては、「安定型得点」が高いほど子どもの「母親への拒否的認知」が高いことが示された。また、母親の育児意識については、「育児負担感」が高いほど子どもの対人的自己効力感が低いことが示されたが、母親の養育態度については有意な関連は示されなかった。

表 4.　母親の愛着スタイル、育児意識、養育態度と子どもの発達との相関

	子どもの発達				
	<母親への認知>		<保育者への認知>		対人的
母　親	受容	拒否	受容	拒否	自己効力感
＜愛着スタイル＞					
安定型	−.10	.39*	−.16	.25	−.22
アンビバレント型	.15	−.21	.06	−.20	−.06
回避型	.29†	−.19	.08	−.12	.15
＜育児意識＞					
育児負担感	−.23	.18	−.05	−.10	−.38*
子どもの発達への不安感	−.06	−.03	.19	−.27	−.19
育児への非充実感	−.02	.11	.06	−.06	−.32†
＜養育態度＞					
自立尊重的	.07	.16	−.10	.00	−.15
威圧的	.01	−.22	.06	−.27	−.12
保護的	.04	.05	.07	.06	−.34†

考　察

本研究では、愛着が、特定の関係性を超えて対人関係全般に影響を与える、という特徴を持つことをふまえ、幼児期の子どもを持つ母親の一般的他者に対する愛着スタイルが育児意識や養育態度、子どもの発達とどのように関連するのかについて検討を行った。

まず、愛着スタイルと基本的属性との間には有意な関連は見られなかった。このことは、個人に内在化された内的作業モデルが加齢とともに安定性､固定性を増していくという Bowlby の考えに合致して、一般的他者に対する愛着スタイルは母親の年齢や就業形態、子どもの性別といった基本的属性によって容易に変動するものではないことを表していると考えられる。

愛着スタイルと育児意識、養育態度との関連については､「アンビバレント型」において有意な関連が示され、他者に対してアンビバレントな傾向が高い母親は､「育児負担感」「子どもの発達への不安感」「育児への非充実感」といった育児への否定的意識が高いことが示唆された。先行研究(小西, 2016)においては、愛着スタイルの「見捨てられ不安感」が高い母親は、子どもの否定的感情に対して「困惑反応」「罰する反応」「矮小化反応」といった否定的な反応が多いことが示されている。このことから、愛着スタイルの中でも、他者の反応を気にして自分に自信が持てず不安感が高いという特性は、育児全般に対して否定的に捉えることにつながる可能性が示唆される。

また、偏相関分析の結果､「育児負担感」「子どもの発達への不安感」を制御変数とした場合には、愛着スタイルの「アンビバレント型」と養育態度の「威圧的養育態度」との関連は見られなかったが、愛着スタイルの「アンビバレント型」を制御変数とした場合には育児意識の「育児負担感」「子どもの発達への不安感」はそれぞれ養育態度の「威圧的養育態度」と有意な関連が示された。このことから、母親の愛着スタイルは養育態度に直接影響するのではなく、育児意識を通して間接的に養育態度に影響する可能性があることが示唆される。つまり、母親の一般的他者に対する愛着スタイルが子どもに対してどのような養育態度を取るのかを直接規定するのではなく、他者の反応を気にして自分に自信が持てない愛着スタイルを持つことは、育児全般に対する否定的意識をもたらし、そのような否定的育児意識が子どもに対する態度に影響していく、といった道筋がある可能性が示唆された。

さらに、母親の愛着スタイルと子どもの発達との関連については、子どもの母親への拒否的認知においてのみ関連が示され、母親の愛着スタイルが「安定型」の傾向が高い場合、子どもは母親から拒否されていると認知しやすいことが示された。母親の安定型傾向の高さは、一般的他者に対する信頼感の高さを表しているため、単純に考えると子どもの母親への受容的認知を高めそうであるが、本研究では逆に子どもの母親への拒否的認知を高める結果となった。この理由として、愛着スタイルが「安定型」の母親は、我が子の要求一つ一つに全て応えなくても信頼関係が崩れることはないと考えており、そのような考えが子どもの「母親は自分の要求を拒否することが多い」という認知につながったのかもしれない。さらに、本研究の対象となった子どもが幼稚園年長児で、基本的なことは一人でできること、次年度は小学校に上がることでより一層の自立が必要とされることから、「安定型」の母親は先を見通して、子どもを甘やかし過ぎないように気を付けていた可能性も考えられる。このような子どもの年齢的な発達特徴が母親の愛着スタイルと子どもの発達との関連にどの程度影響するのかについて、今後は別の年齢の子どもを含めた検討が必要であると考えられる。

また、子どもの対人的自己効力感については母親の愛着スタイルとの関連が示されず、母親の育児意識の「育児負担感」との間にのみ有意な関連

が示された。上述したように、「育児負担感」は母親の愛着スタイルの「アンビバレント型」と有意な関連があるため、他者の反応を気にして自信が持てないという傾向は、母親が育児を否定的にとらえることにつながり、そのような否定的な意識が、子どもが他者に対して効力感を発達させることを阻害しているのかもしれない。

本研究の結果から、母親の愛着スタイルと子どもの対人的自己効力感との間に直接的な関連は見られず、愛着スタイルは母親の育児意識を媒介にして子どもの対人的効力感に影響を与える可能性が示唆された。一方、先行研究(久崎, 2014)では母親の愛着スタイルと子どもの心の理論の発達との間に関連が示されていることから、母親の一般的他者に対する愛着スタイルが、養育の特徴を含めてどのようなメカニズムで子どもの発達に影響していくのかについて、今後は様々な子どもの発達を取り上げて詳細に検討していく必要があるだろう。

引用文献

後浜恭子. 1978. モデルへの依存性と養育態度の認知が幼児の模倣行動におよぼす影響. *心理学研究*, 49, 241-248.

荒牧美佐子・無藤隆. 2008. 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い:未就学児を持つ母親を対象に. *発達心理学研究*, 19, 87-97.

Bowlby, J. 1977. The making and breaking of affectional bonds. *British Journal of Psychology*, 130, 201-210.

Crowell, J. A. & Feldman, S. S. 1991. Mothers' working models of attachment relationships and mother and child behavior during separation and reunion. *Developmental Psychology*, 27, 597-605.

Feeney, J. A. & Noller, P. 1990. Attachment style as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 281-291.

林 勝造・一谷彊・小嶋秀夫. 1987. *親に対する子どもの認知像の検査法：CCP 解説 1987 年版*. 大成出版牧野書房.

Hazan, C. & Shaver, P. 1987. Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.

久崎孝浩. 2014. 子どもの心の理論発達と母親の愛着スタイルの関連性：日本とスリランカの比較. *応用障害心理学研究*, 13, 19−36.

柏木惠子. 1988. *幼児期における「自己」の発達*. 東京大学出版会.

小西優里絵. 2016. 親のアタッチメントスタイルと養育行動が子どもの行動特性に与える影響. *保育学研究*, 54, 83-94.

森下正康. 1985. 幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング：教師モデルに関する受容的－拒否的態度. *心理学研究*, 56, 138-145.

園田菜摘. 2016. 幼児用対人的自己効力感尺度の開発. *小児保健研究*, 75, 100-106.

詫摩武俊・戸田弘二. 1988. 愛着理論からみた青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み. *東京都立大学人文学部人文学報*, 196, 1-16.

謝辞

本研究の調査にご協力いただきました、お母様、子どもたち、幼稚園の関係者の皆さまに深く感謝いたします。